

# 令和2年度 磐田市立豊田南中学校 学校評価書

重点	目標・取組(項目)	評価指標	自己評価	考察・改善策	学校関係者評価委員から
学校経営の視点		保護者は、学校が目指している子どもの姿や教育内容について知っているか。	A	89%(昨年度も89%)の保護者が「たよりなどを通して、学校が目指している子どもの姿や教育内容がわかる」と回答している。コロナ禍のため、参観会は中止、体育大会や合唱コンクールなどの行事は学年別や時間差など、密を避けながら保護者に参観していただいたり、ホームページで動画を公開したりした。参観者やホームページ視聴者は多く、保護者の関心は学校に対してとても高いと感じた。また、91%(昨年度は87%)の生徒が「先生は自分のことを理解してくれる」と回答している。教師と生徒との信頼関係が構築されていると考えられる。今後も、一人一人の生徒の内面理解と個々のニーズに対応した支援に努めていきたい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍で様々な行事が変更や中止等の中、その変更、中止の理由、過程が「お便り」でどこまかに伝わり、「見える化」ができていて安心でき納得がいった。できる事を柔軟な対応で行ってくれた事に感謝している。</li> <li>・コロナ禍の大変な時期、「先生は自分のことを理解してくれている」と回答した生徒が多いことは、教育の基盤となることであり、貴重なことであると思う。一人一人の生徒個々のニーズは、関係者、関係機関の検討、気付きなどで初めて把握できるものもあると思う。ニーズの掘り起こしやニーズにせまるる方法を模索、実践し、その結果を共有して伝えていってほしい。</li> <li>・様々な行事に関して代替案等考えてくださりともありがたい。その様な熱意が子どもたちにも伝わり先生との信頼関係が構築出来ているのだと思う。</li> </ul>
		先生は子どものことを理解して指導にあっているか。	A		
伝え合い学び合う力の育成(自ら学ぶ)	よくわかる授業の実践	生徒は、授業で学習した内容がわかっているか。	A	84%(昨年度は85%)の生徒は「授業で学習した内容がわかる」と回答している。ICTの活用を含め、教師が授業改善に取り組み、「わかる授業」を追究し、実践していることと表れであるといえる。一方、「進んで学習している」と回答した生徒の割合は67%(昨年度は70%)と低下傾向にある。コロナ禍の臨時休校で様々な学習活動を中止や短縮せざるをえなかったことや、外部人材を活用した学習場面が減ったことも要因として考えられる。生徒が自ら学び、社会の激しい変化にたくましく対応し、自立していけるようにキャリア教育の視点をさらに重視して教育活動を行うとともに、家庭学習の在り方を見直し、生徒が主体的に学習に取り組むよう手立てを講じていきたい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中3の娘が体験した「S.P.E.A.Kプロジェクト」では活きた英語の実践の場として、とても貴重な経験だった。英語を話す事や聴く事、ジェスチャーを使ったり、写真を使って「伝える」事に集中した時間であったようで、良い取組だと思う。</li> <li>・「進んで学習している」子は、目標があり、成功体験を積み重ねている。子ども一人ひとり、何がきっかけになるかわからないので、中学校のみならず、中学校と連携した家庭での動機づけが重要と思う。</li> <li>・「生徒は、住んでいる地域のことに関心があるか」の指標に対し、評価はBであった。コロナ禍の影響もあり、特に地域との接触機会が低減したことも要因の一つと考え、地域とのつながりの希薄化や親が身近な人から子育てを学んだり、助け合ったりする機会の減少等、環境変化もあるが、地域社会全体で支えることが重要と考える。</li> </ul>
		生徒は、進んで学習しているか。	B		
		生徒は、住んでいる地域のことに関心があるか。	B		
かかわり合いを深め質の高い集団の育成(共に生きる)	主体性の実践	生徒は、自分の進路や将来の生き方について考えを持っているか。	A	「進路や生き方について考えている」の肯定的な評価は79%(昨年度は80%)である。また、生徒が「目標をもって生活している」と答えた割合は81%(昨年度は83%)であった。コロナ禍の中で学習や部活動、自分の進路に対して明確な目標を持ち続けられなかった者もいるかもしれないが、中でも生徒はよく頑張っているといえる。新しい生活様式の中、これまでの方法を見直し、工夫して教育活動を行い、CSと連携し地域人材を活用しながら、地域や社会とのつながりの中で、「生きる力」を育てていきたい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍で学習環境が大幅に変化したことや、新しい生活様式への移行等は、生徒に精神的ストレスとして大きな影響を与えたと思うが、自分の置かれている状況をよく理解し、目標を持って努力している様子が伺える。</li> <li>・磐周大会がなくなった時は目標がなくなり親の私でさえも声を掛けることが出来ないうくらい娘は落ち込んでいた。「目標を持つ」ということがいかに大切かという思い知らされた。</li> <li>・進路という面で、各高校から先生を招き学校紹介をしてくれ、それがきっかけで高校のパフレットだけでは選びきれなかった高校の魅力を知った。やはり「生」で直接聞ける事がその熱量が伝わる大切な事であると感じる。</li> </ul>
		生徒は、目標を持ち毎日の学校生活を送っているか。	A		
	共生する態度の実践	学級(学校)には、互いにルールを守り協力する雰囲気があるか。	A	「ルールを守り協力する雰囲気がある(89%)」「相談できる友人や先生がいる(88%)」「学校が楽しい(86%)」の3項目の結果から、学校全体の雰囲気や学級風土に落ち着きがあり、安心・安全な学校生活を多くの生徒が送れているといえる。その一方で、「欠席率が高いこと」は継続して本校の大きな課題である。魅力ある学校づくりを推進するとともに、教育支援員・SC・SSWや支援センターなど外部人材・機関と学校・家庭とが上手に連携しながら、新規の不登校生徒を生み出さないよう地域全体で生徒を育てていけるよう心掛けたい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間、決まりやルールを守ることは人として大切な部分ができている。</li> <li>・自分が子どもの時と違い、「欠席率が高いこと」には驚かされた。VUCA時代の中、子ども一人ひとりの事情は複雑になっており、中学校のみでの解決は困難であり、家庭、地域との連携強化が必要と考える。</li> <li>・90%近い生徒が楽しい、相談できる友達がいるという状態で「欠席率が高い」ことが課題であるとは、思春期の難しいゆえの問題があるのだろうか。</li> <li>・若者白書の中で、子どもに関する団体や行政機関がそれぞれに地域の子どもの実情を把握しているものの、情報共有がないことから、放課後の子どもの居場所がどこで、何をしているかが広く知られていない現状がある。地域、学校および家庭が連携し情報提供と共有を図ることが必要と考える。</li> </ul>
健やかでつよい心身の育成(心豊か)	心身を成長させる諸活動の実践(南中賛歌)	生徒は、あいさつや返事がしっかりできるか。	A	「あいさつ・返事ができる」と感じている生徒が92%、保護者は82%と捉え方に差がある。交通安全指導を行ってくださっている保護者の方から、もう少し元気な挨拶ができたらよいという声もいただく。今後も、生徒会を中心に南中賛歌の1つである「美しい挨拶」とはどういう挨拶か学校、学府全体で考え、自ら進んでよく挨拶ができる温かな雰囲気を地域全体で作り上げる活動を試みたい。また、ボランティア活動は、コロナ禍のため様々なボランティアの募集が中止となるなど、「積極的に参加している」と答えた生徒は66%と例年と比較して低かった。ただ、落ち葉集めや、草取りなど校内でできるちょっとしたボランティアに気がついて実践できるよう、生徒会を中心に働き掛けていきたい。校歌はコロナ禍のため、歌う場面はなかった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍の影響から、井通地域づくり協議会が開催予定の行事については多くが中止となり、中学生地域リーダー養成講座に参加する機会が得られなかった。今後は、同じ内容の行事をかたくなに継続するのはなく、取り巻く環境に応じ視点を変えて、有効で魅力ある取り組み方法を検討していく。</li> <li>・コロナ禍で校外のボランティア活動も中止が多く、残念に思う一年だった。withコロナの時代、限られた中でもできる事を増やしていけたらよいと感じる。</li> <li>・今年度はコロナ禍の中で色々な行事が中止されたり規制を受けたり、本来の活動が出来なかったことは残念ではあるが、しばらくはコロナ禍が収まるとは思えないため、今後の未来を見据えた学校施策を期待する。</li> <li>・「あいさつ」は校内ではできても、地域ではなかなかという生徒もいると思う。地域の大人たちとともに青城地区として取り組めるとよいと思う。</li> <li>・登下校中、すれ違いに子どもたちからあいさつされることもある。大人から率先してあいさつしていくことが子どもたちへ広げていく肝になるかと思う。</li> </ul>
		生徒は、校歌を堂々と歌うことができるか。	-		
		生徒は、ボランティア活動に積極的に参加しているか。	B		

<学校関係者評価を受けてのまとめ>  
 ○今年度はコロナ禍のため、学校行事や学校生活の中心となる授業の在り方についても、今までと異なる対応を迫られた。その中で本校が行ってきた教育活動に深い理解を得られた。  
 令和3年度は新学習指導要領実施となるが、主体的に対話的で深い学びをwithコロナの中で追究していく。また、一人一台端末を積極的に利用し、学習課題解決のためにICTを活用する力を伸ばしていきたい。  
 ○深い生徒理解を基盤として「魅力ある学校づくり」、「居心地のよい学級づくり」、「わかる授業づくり」を進める。また、SCおよび外部機関との連携を図り、本校の喫緊の課題である不登校への予防と対応を図る。  
 ○井通・青城学府小中一貫教育による、あいさつ運動や健康教育など、小中9力年を見通した取組を推進し、学校から家庭や地域へと輪を広げられるよう努める。